

家庭科の男女共修をすすめる会

ニ
ム
一
ス
ル
5

※発行日 '50 3. 26

一部 50 円

※連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

婦選会館内

TEL 03-370-0238

テーマ

「家庭科教科書を点検する」

日時 二月一日PM1・30～四・30

場所 婦選会館

報告者 伊藤文子さん(家永裁判を支援する会)

ニュースNo.4でもお伝えしたようにわたくし達は母親や学生による家庭科教科書研究グループをつくることも考えている。二月の集会では高校の家庭科教科書を全般的にみてどんなところが問題か考えてみることにした。講師の伊藤さんは大学生の娘さんと高三の息子さんを持つ主婦で、ずっと家庭裁判を支

第六回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

◎第六回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

△テーマ「家庭科教科書を点検する」……(1)

◎東京学芸大付属世田谷中学校の男女共修「技術・家庭」指導内容……(4)

◎京都府立城山高校の男女共修「家庭一般」指導内容……(5) (7)

◎教課審委員の方々を訪ねて……(7)

◎日教組教育研究全国集会家庭科分科会……(9)

◎「奥さんといっしょに」中学生の感想……(10)

◎「奥さんといっしょに」をみて……(11)

◎国民文化会議「生活の質を考える」……(12)

分科会で家庭科の共修を訴える……(12)

◎日誌メモ……(12)

次回会合のおしらせ

== 第七回討論集会 ==

テーマ 『共修の家庭科で何を教えるか』
学芸大付属世田谷中の男女共修の教育内容について
報告者 加藤とみえさん(学芸大付属世田谷中)

参加費 200 円
日時 4月19日(土) pm1:30～
pm4:30

場所 婦選会館
渋谷区代々木2-21-11
TEL 03-370-0238

援する会にかゝわってこられた方、素人の立場からと繰り返されながら現在の家庭生活とあまりにとかけ離れた内容について熱っぽい批判をつづけられた。

伊藤文子さんのお趣旨

わたくしは家永裁判を支援する運動のかゝりの中で、社会科学の教科書ばかりでなく国語や理科の教科書も読む機会を持ったが家庭科の教科書についてはその機会がなかった。それは私が怠慢というよりも、娘の家庭科の授業では教科書を殆んど使用していなかったからである。娘が高三になったとき、いきなり家庭科が割込んできて、しかも必修だというので受験勉強に追われている娘は相当悩んだようである。しかし受持の先生の配慮から前半は戦後の家庭科教育の変遷について、即ち国の教育行政の変化と女子教育のかゝわりといった視点から学び、後半は女性史の勉強を中心にしたようだ。これなら現実役に立ちそうにない実技中心の家庭科に比べ上々だと油断していたのである。このたび48年度改訂の家庭一般(教育図書)を読んでみてその余りのひどさに驚いている。

先ず家庭生活の人間の側面を学ぶ家庭経営について「…各人が平和で調和のある家庭

生活を営むためには中心の父母をたて、たのしい中にも秩序があり規律のある生活をする必要がある。…また祖父母と同居し得ないような家庭では、しばしば祖父母を招くことによって孫たちとの接触の機会をつくって、年月を経た暮しの知恵や出産育児教育などの知識を学び、先祖の話、土地の歴史や習慣など貴重な話をきくことにとめたいものである。」これでは教育というより訓育とよばれるべきだろう。わたくしは四十代主婦は戦争中の家政教育の中で姑さんにつくすという目的でマッサージまで習わされ、内心はげしく抵抗したものである。料理実習も多かったが積極的に学んだという思いは全くないため位しか上手にできない現在の自分にむしろ自虐的な欬びを感じているのであるが、過去も現在もその基本構造は同じようなものではないか。また家族のライフサイクルと生活設計のところでは、家族の基礎確立期として夫の年齢は32歳、妻は28歳までとなっていて、次の活動期には夫は45歳、妻40歳まででその間子ども幼稚園や小学校入学が続き、それ以後この家族は安定期に入ると書かれている。しかも、御丁寧なことに夫婦の年齢が60歳前後になったら慰安期に入るといふ。何

たる画一性、はじめはばからしいと思っただが途中から怒りて興奮してしまった。またこんな部分もある。「物質的に豊かな生活という単純な要求から主婦や家族が就労したために、家族が心身の安らぎの場として機能が失われ、家族間の平和や健康が不安定に陥入っている例がある。個人の尊重が逆に自己主張となって相互の理解を欠いたり人間関係の不調和もみられる。物質文化の向上が優先し家族生活が精神面でおびやかされていることは大きな社会問題と云えよう。」主婦の社会参加を一方的に物質文化向上のためと決めつけ、水をさすようなこの云い分は主婦の立場として納得できない。また48年度改訂版から、作法の実習がもり込まれている。

「…重い物は両手で低く持ち、書物のようなものは丁寧にこう進める」絵入りで示されている。作法がこういうことで身につくかどうか疑問である。生活の問題を内面からまたは科学的観点から学ぶのではなく、形式や型の問題として上から規制して方式、それは作法や到底こなしきれない量の料理や裁縫の実習などである。

現在の家庭生活は殆んど全面的に市場経済に依存していてそこで必要なのは消費の選択性・管理の問題などであろうが、家庭科の教科書で最も不満なのは、食品公害やら生協活動など現代の問題が殆んどないことである。僅かに、アメリカ大統領、ジョン・ケネディが特別教書の中で消費者四つの権利をあげたと紹介されているだけである。

つぎに教科的記述の問題点についてお伝えしたい。現在問題になっている中性洗剤について、四八年度改訂版以前では洗浄や熱湯によって失われる栄養素なども記されていたが、この教科書ではたゞ単に中性洗剤は正しく使えという記述である。

中性洗剤使用によるABS残留量の測定値が記載されているが、洗剤の濃度、食品の新鮮度、キズの有無など書かれていない、これは科学的に間違っているのではないか。

また保育の問題について、でてくるのはしつけの問題ばかりで、親が一貫した態度でもっとも望ましく調和のとれた生活態度こそ大事であるという抽象的な心構えを強調し、生命の尊重という観点から説いたものは皆無であった。しかも家庭教育は「離婚、別居などの崩壊家庭や母子家庭、あるいは一人っ子や大家

族が問題となるのは、このような条件のもとでは以上述べたような望ましい養育態度がとられにくいからだ」とある。そして両親が望ましくない態度を長期に重ねたとき子どもの性格の上になんか影響があらわれるかとして拒否的態度、矛盾的態度、支配的態度、服従的態度とある。何たる偏見と差別に満ちた内容、わたくしも二人の子どもを育てているが毎日が試行錯誤の連続である。親も子もあちらにぶつかりこちらにぶつかりながら生きているのである。しかし家庭科教科書は簡単にに総括して「家庭における円満な家族関係や協力的態度、よい作法などはすぐれた社会性を養ない、やがて幸福な社会生活をする基盤となる。」と結ぶ。人間生活の幸福とは何か、もう少しその原点をきちんとおさえられるような教科書にかえるようにみんなががんばっていきなさいと結ばれた。

ついでつぎのような質疑や意見が出された。

伊藤さんが読んだのは教育図書発行のものだが、現在、高校の教科書は五冊、編者が圧倒的に多いのが家庭科の特長、教育図書は二七名、学研は十六名となっている、こんなに

編者が多くては意志統一は不可能ではないか。中学の先生から、高校の教科書と中学のそれと非常によく似ている。使われている図表なども殆んど同じである。重複しているという指摘。

現場では教科書は資料用として僅かに使用する程度で、心ある教師は殆んど自主教材でまかなっているという報告。

家庭科教科書告発のむづかしさは家庭訴訟のように学会の定説と明らかに違うようなことを教えているわけではない。洗剤の問題にしても学会の定説とそんなに大きく開いていないところにもむしろむづかしさがあるという意見。

こんな内容では共修どころか廃止してしまえという絶望論もだが、これはわれわれ大人世代の責任である。われわれが消費文明を無批判にうけ入れた結果、そのゆがみがすでに現在の若もの世代にでている。この構造の再生産をくい止めるには生活矛盾を教育の中でどうとらえてゆくかしかないのだという反論があった。

昭和49年度 男女共修「家庭一般」指導計画表

京都府立山城高等学校

指導内容	時間	留意点	備考
「家庭一般」の学習について	2	家庭生活を科学的に解明し、現実生活において実践的に生かしていくという課題の重要性 なぜ共修になったのか(歴史的に把握させる)	学習内容、学習方法、評価などについて
I 生活と家族			
1. 生活の現状	3	いのちを守り、くらしを豊かにする生活条件が整っているか否か 生活破壊の実態に目を向けさせる 各班が自主的に課題を選び調べる	アンケート(生徒) 班別学習
2. 家族の歴史とその機能	6	歴史の流れの中でどのように変化して来たのか、変化していくのか(自ら変えていくか)	家族史 婚 史 女大学
ア、家族の形態と機能の変遷			
イ、性の問題 結婚の意義		性の問題の歴史的考察 社会的背景と性の位置づけとのかかわり	恋歌の変化
ウ、家族関係			
3. 家庭生活と法律	4	人間らしい生き方、権利意識の自覚 民主的家族の創造への実践力をつける 現行憲法・民法のよって立つところは何か(主旨)。賛否のポイントはどこにあるのか	アンケートについての考察 人権・生存権 男女平等 親族・相続編
ア、憲法・民法と家庭生活			
4. 家庭生活と職業	3	労働のもっている意味と役割について 婦人労働の現状と問題点 家事労働をどのようにとらえるか	労基法 班別学習 母性保護 アンケート (父母・生徒)
5. 余 暇	1	家庭生活における余暇の重要性と正しいあり方について考えさせる(実態はどうか)	レジャー消費
6. 保 育	7	家庭生活や地域社会における子供の現状について着目させる 子供の発達をどうとらえたらよいか(発達を保障するということの意味は)	子供の人権 過保護 育児ノイローゼ
ア、子供の生活の現状			
イ、子供の発達		発育の加速現象と個人差について 障害児の保育・福祉の実態はどうなっているか 児童観の推移と社会的背景との関連について考えさせる	児童憲章 児童権利宣言
ウ、障害児の問題			
エ、保育と社会		児童観の推移と社会的背景との関連について考えさせる	
オ、これからの保育		集団保育の意義と今後の課題について認識させる	スライド・映画
	(26)		

「家庭科の男女共修をすすめる会」では、昨年五回の集会で、男女共修の家庭科の実践報告を聞き、男女の特性をめぐって、文化人類学者・児童心理学者・教育社会学者・婦人問題研究家の講演を糸口に討論を重ねました。本年二月一日の集会では、家庭科教科書をめぐって問題点を話し合いました。こうして問題を掘り下げる中で、どうしても家庭科の教育内容を考えなければ、という意見が高まってきました。「運動と共に教育内容の検討を」との意見は、会発足当時から強く主張されていきました。教育課程審議会の委員の方との面会においても、具体的な教育内容について案があれば有力な資料となり得る、との言葉を何人かの方から聞きました。

そこで四月十九日の集会では、「家庭科の教育内容」について検討することになりました。当日は東京学芸大付属世田谷中の加藤とみえ氏が、同校の男女共修技術・家庭科の教育内容を報告されます。同校の指導内容と京都府立山城高校の指導計画表を次に掲げましたので、集会に参加できる方はむろん、参加されない方も、十分ご検討いただきたいと願います。参加できる方は、当日このニュースをご持参下さるようお願いいたします。

東京大学付属世田谷中学校

男女共修「技術・家庭」指導内容

学 年	担 当 者	分 野	内 容	
			基礎的なもの	発展学習
1	N 技術科 教師	住 居	自分の部屋 家の中の位置 間取、縮尺 照明 ヒーター	方角、方位 製図 積算電力量のよみ方 家電の電力量
	K 家庭科 教師	食 物	でんぶんの性質 小麦粉の性質 卵の性質	ブラマンジェ ホットケーキ
2	N	住 居	配線 テスター ハンダ 接合 ねじ 接着剤	テスター作り ブザー作り
	K	被 服	布のなりたち せんいの性質 衣料事情 消費生活	被服整理 染色
3	N	住 居 (庭)	家と宅地 高層住宅 遊び場 緑化 庭	すまいの設計 鉢作り
	K	家 族	家庭のなり立ち 乳幼児の発達 幼児の生活習慣	玩具製作 研究発表

	指導内容	時間	留意点	備考
三 学 期	3. 住生活 ア、住居の変遷	1	住生活の変遷とその社会的背景について考えさせる	住居史 食寝分離
	イ、健康な住生活	1	住生活の基本的条件について認識させる	就寝条件 プライバシー
	ウ、住生活の現状と課題	2	住生活の現状と住宅政策とのかかわり 環境づくりについての自覚と権利意識を持たせる	環境権
	1. 食生活のつづき		食生活の現状についての課題をまとめる	班別学習 選抜能力
	ウ、食生活の現状と課題 調理実習 1回	2 4	食品の取り扱いに関して、食品衛生・食品公害などの視点から考慮させる 高校生の弁当の実習(各種) 栄養と年齢・性別・労作の関連 基礎的技術(安全・衛生)の学習	朝食抜き 肥満児
	II 生活と経済のつづき			
	4. 消費者問題	2	衣食住生活の課題をふまえ、消費者としての権利を自覚させる	消費者運動
	5. 社会保障 ア、歴史 イ、実態と課題	2 2	諸外国における社会保障の歴史と現状 わが国における現状について認識させる。福祉国家とは何かを考えさせる	ドイツ・アメリカ・イギリスなど
	まとめ	2	家庭生活の理想像と展望について生活を 社会との関連においてとらえる力 科学的・自主的に変革していく力が養われたか	作文 アンケート (一年間の反省)
		(18)		

	指導内容	時間	留意点	備考
二 学 期	II 生活と経済			
	1. 家庭経済の現状	1	家庭経済の現状を戦後の流れの中でとらえさせる	経済政策とインフレ
	2. 収入について ア、所得の実態	3	国民総生産と国民一人当たりの所得のずれ 格差賃金 } など国際比較の中で考えさせる 生活水準 } せる	年齢別・性別 規模別・学歴別
	3. 支出について ア、支出の実態	4	各支出費目の問題点、特にその増大の理由について考えさせる(エンゲルの法則停止の現象)	食物費 住居費 教育費
	イ、税金	1	わが国の税制の現状と国民の税負担について検討させる(貯蓄率とのかかわり)	班別学習 直接税・間接税
	ウ、物価問題	2	物価のしくみを明らかにする 物価上昇の要因は何か	公供料金 流通機構 国際比較
	III 生活と衣食住			
	1. 食生活		物価問題を糸口にして健康保持に最も必要な食生活の実態に着目させる 一人一月いくらかかるか	
	ア、食品と栄養 (献立学習)	5	各自の食生活の現状について考えさせる 栄養の基礎的知識・理解の復習 朝・昼・夕の献立作成について	班別学習
	イ、調理実習 2回	6	家族の健康を維持し、子供の成長に役立つための食生活経営に要する費用と物価とのかかわり合いを認識させる 支出の中で占める食物費の割合について再考させる 〇〇円で作る献立の実習、実習のオリエンテーション 一回目 和風日常食から 二回目 洋・華風日常食から	理論生計費
	2. 衣生活 ア、被服と社会 イ、被服と健康 ウ、衣生活の現状と課題	1 1 (26)	衣生活の変遷とその社会的背景について考えさせる 被服材料の性能について、必要最少限の知識理解 現状についての問題点を明確にさせて主体的な衣生活を営む力をつける	流行・慣習 繊維公害 被服の商品化 画一化 選択能力 管理能力

「女性が家庭生活の中心になっているのは現実」「教育は社会の実態をふまえないければ」と、現状を擁護するようなこともおっしゃいます。

「女性もやらなければ」とや、共修に積極的なご意見と思われましたが、「制度のことは何ともいえない」ということをくり返しておっしゃいました。

一月と二月には、発起人は次の方々をお訪ねしました。

一月二十日 高山政雄さん

(駒場東邦中学校・高等学校校長)

一月三十一日 岩淵悦太郎さん

(国立国語研究所長)

二月三日 水野忠文さん

(東京大学教育学部教授)

二月五日 石川忠雄さん

(慶応大学法学部長)

二月二十五日 斎藤 正さん

(国立劇場理事長)

現在の「女だけの家庭科」に固執しようとする意見はなく、男子にも生活についての認識を持たせるような教育が必要だということは一応認めていたのですが、それが必ずしも「家庭科の男女共修をすすめるべきだ」というところと結びつかないようです。

石川さんは、「教育制度の上で男女に差をつける必要はない」「生活科学的なものなら男女いっしょにやっても」としながらも、

齋藤さんは、「家庭の地位、機能を青少年に教えるべきであることはあきらか」だとはおっしゃいますが、「隣接教科も含めれば、現在の指導要領の中にも、家庭生活のことは十分盛り込まれている」「学校でのカリキュラムは本来伝統的なもの」「一足とびの議論で今ある大事なものをつぶしてはいけない」と、改革には消極的でした。

水野さんは、私たちが面会をお願いしたところ、東大附属の共修の実態を調べられ、男子も喜んでやっていることを確かめてくださいました。生活認識のための教育の必要性はかなり強く感じていらっしゃるようなお話でしたし、体育という男女差のあらわれやすい教科が専門なのに、男女で教科の時間数に差をつける必要はないということを強調していらっしやいました。けれども、「家庭科の8男女共修という、男の子に裁縫を教えるような感じで、イメージとして損ではないか」というご意見でした。

高山さんは、「生活についての基本的なことは男女ともやるべきだ」。けれども、「男子校で家庭科というのは考えられない。社会科や道徳の時間にやってはどうか」というご意見で、しかも「家庭は大事だから母親がしっかりしなければ。女子教育は大事だ」「女性には女性らしい教育を」と、男と女をかなり分けてお考えのようでした。

「家庭科」「生活」ということは自体、男性の委員の方と、女性の発起人の間にイメージの違いがあるようですが、やはり、教科内容の実例を、早く、誰にもわかるかたちで示さなければならぬと痛感いたしました。

(梶谷)

日教組教育研究

全国集会家庭科分科会

(50・1月24・27日、於岡山市就実女子高校)

一万五千名が約25の分科会にわかれ、家庭科は、連日約三〇〇名をこす参加者で盛況でした。実践報告は、小・中・高あわせて約55支部より提出されました。討議はそれらの内容をふまえて、

第1日 家庭科教育をめぐる諸問題

第2日 環境破壊と家庭科教育

基本的な人権と家庭科教育

第3日 家庭科の独自性・系統性

何を、どう教えるか

第4日 これからの研究・運動の進め方

をテーマに、小・中・高分散会、全体会を交互にもちながら討議を深めました。

家庭科の男女共修に関する報告は、中学校から10、高校から8出されていましたが、第二日目の中・高分散会では、それを主題としてとり上げましたが、中学校では技術科との合同集会にしたため、技術科と家庭科の共修実践を報告し合って、技術教育とは何

か、家庭科教育の本質は何かを共通に理解し合うにとどまり、二系列の内容を統一的にとらえる教科論と別だてにする教科論とは今後の課題としてとされました。

しかし、共修についての中学校のレポートの大半は共修の実践報告で京都からは製図・染色、宮崎は食品公害、岡山は製図・食物・衣料、鹿児島は食料、岩手は電気、福島は製図、千葉は保育、石川は栄養・しみぬきと、その内容は多少「技術科の領域」に偏ってはいませんが、とも角全国的に共修の実践がひろがっていることがあきらかにされました。千葉の「保育実践」というのは、レジャーブームのなかの民宿地の性的たいはいの現状をふまえて、中三の男女に「生命誕生」の神秘的な現象をスライドでみせるところから子どもの人権をまもる立場で保育を教えたというものでした。

高校の授業実践は、長野高教組と岩手の水産高食物科から報告があったほか、千葉と東京の傍聴から三つの事例(日体柏、都・農林、都・大島)もいづれも「家庭一般」の共修の報告のあったほかは、教育内容の研究や地域の実態調査が中心になっていました。

そのうち、兵庫高教組の内容研究は組織的

で規模も大きく、福岡の継続研究とともに貴重な資料を提供してくれました。

討議のなかでは、①人間が生きてゆくための知識・技術は男女を問わず必要で、共修が当然、②その内容は、憲法24、25条をうらづける衣食住・保育・家族・家計などで、生徒の生活現実即ち教材を選び、配列する、③共修を実現するには、教師自身の自主的なとりくみ、研究の組織づくり、校内、地域、行政の民主的な体制が必要である。と確認されました。また、女子だけの家庭科でも真に教育的な内容であれば当然男女共修にも耐えうるはずで、共修を待つまでもなく現行内容の自主編成が必要であるとの指摘がありました。

そのほか、職業教育としての家庭科課程に男子生徒がふえてきている現実からいっても家庭科課程に男子の入学増を推進すべきだとする提言もあり「共修もんだい」は家庭科教育界をゆする旋風となって、当事者を浮き足立たせているような印象すら受けました。

会からは中嶋がパンフやニュースを大量に持参し、討議にも参加しましたが、反応も大きく「物」はたちまちのうちに売り切れしてしまうという有様でした。

(和田)

「奥さんごいっしょに」 中学生の感想

岐阜市長良中学校三年生の、放送についての感想文の一部をご紹介します。

小学校までは男女いっしょに家庭科をならい、調理したり、洗たくしたり、男女同じように学習してきた。どうして中学校になったら男女別々になったのだろう。私だって男子が勉強していることを習いたい。ラジオをついたり、台をついたり。男子は男子で調理の学習をしたいと思う。

ところで「家庭科」というものは受験にさしかえる」と意見として出たようだが、私はそうは思わない。家庭科というものはこれから先ズッツと役に立つと思う。英語や理科よりも。

家で教えるといっても、技術などは教えられるが、考え方などはやはりみんな考えていった方がよいのでは……と思うし、家で教えるとなると、その家のことでうけつぐみたような形になって進歩はしにくいのではないだ

ろうか。学校教育で、生きて行くために最低必要な知識は、やはり教えて行くべきだと思し、その点で家庭科という分野は独立していると思う。だから、今の家庭科に不満があるのなら、やめてしまえでなく、よりよい方に、変えていかなければならないのではないか。

その点で半田とかいう人に賛成である。男女共修については、やはり女子は家庭にとじこもって家事をするというより、封建的な考え方はもう古いと思う。今は男女だれでも充分に能力を発揮できる時代であるし、個人々々に個性があつて、それぞれの道があるのだから、男子でも衣服、食物、住居などについてある程度基礎的な知識があつた方がよい。女子についても、機械などについて基礎的な知識がほしいと思う。

「家庭科の授業をけずってもっと主要科目を多く学ばせたい」というのが親の意見らしかったが、私はここで疑問がわく。「親っていうのは、いったい自分の子どもをどういう人間に育てたいのか?」……私だったら、何事も平等に見られ、人々のことを考えてあげられる、物事に偏見をもたず

ちゃんと社会人としてやっていけることを望むが――

E・Mさん

家庭科を学ぶ中で、いろいろな考える力を養うことが大切だ。今まで他の教科と比べて家庭科というものは、なんかすみっこにおかれていたみたいだ。だが家庭科というものは、人間性をつくり出すにも大切なものだ。ブラウスを作ったり、料理をうまくすることだけでなく、その中から生きる力をうむのだ。ときには楽しい作業であり、ときには根気のいるいやな作業でもあろう。だがそのいやなことでも切り切れず何ができるのだ。ただ英語や数学を頭の中だけで考えているのでは、その知識はつくが、家庭科みたいに実際に体を動かして得るというものは何もないだろう。

とにかく、家庭科というものは、男女の別なくなるべきだ。

A・Kさん

「奥さんごいっしょに」をみて

2月4日、5日の2日間、NHKの朝の番組「奥さんごいっしょに」で家庭科の男女共修の問題をシリーズで取りあげました。

中学の場合を中心に、一日目が「男の子と家庭科」、二日目は「家庭科の男女共修をめぐる」というタイトルで話し合いがなされました。家庭科の男女共修をすすめる会からは半田たつ子さんが問題提起者というかたちで出演され、家庭科の男女共修に賛成する側と反対する側との意見交換がなされました。

家庭科の男女共修に反対する意見のおもなものを拾いあげてみます。「男の子がしゅうをししたり雑巾を縫ったりしているのを見るのはイヤだ」「男と女とせっかく別れているのに男に女の領域を侵されたくない」「貴重な時間を無駄なこと(家庭科)で費されたくない。もっと社会に出て役立つことを学んで欲しい」「風景としてイヤだ」「男の世界と女の世界があるのだから……」「現在の家庭科では男子は出来ないではないか。女子ならこそが」「家庭科の点数が女子だけよくなっ

て男の子は困る」「学校を出たら、男は社会に出て、女は家庭に入るといのが一般的な傾向なのだから、それに見合った教育なのだと思う」

文部省側の意見としては「中学校の技術、家庭科の場合、別学ではあるが教科内容はダブっているのが多い」ということでした。

このように拾いあげてみますと、反対意見の根拠となっているのは、将来において、男は社会に出て働き、女は家庭に入って家事をする、その役割分化にそった教育なのだということ。この受験競争の激しい時に何故男の子が貴重な時間を費して家庭科をする必要があるのか、家庭科をするぐらいなら別の教科

をやって欲しいという現実合理主義。そして男の子が家事をするのは風景としてイヤだということ。それは自分たちが見慣れていない状態に対する反発なのだと思うが、その発想の根底には、男の子は男らしく、女の子は女らしく、ということがあると思う。ほんとはそのらしさも作られ、教育されてきたものであるはずなのに、天性であると確信しているところに頑強さがあるようで、どのような角度から擬子入れしたら理解してもらえないかと、考えさせられてしまった。

そして、文部省側の意見として、教科内容はダブっているのだという説明……教科内容がダブっているなら何故別学制を取る必要があるのか、それも中学校の義務教育のなかでと、大変疑問に思いました。

唯、私の友人・知人もついぶんテレビを見ていたが、その人たちの意見では「どうしてあんなにも男の子にも家庭科が必要なのだということがわからないだろう」とか「一緒に見ていた息子がうんざりして『ああいうことだから、いつまでたっても駄目なんだよなあ……』と嘆いていたわよ」などということを聞いて、わかることは、わかるのだと勇気づけられたりもしました。

私はやはり、自分が住みよいだろうと考える社会に向かって進む勇気と、私たちにとって生きよい社会とはどんな社会かと考えた時、男も女も、他人に依存することなく自分の可能性を切り開いてゆける社会なのではないか。男が生活全般を女に依存し、女は男に経済面で依存しているという状態ではなく、ひとり人間として自立出来ること、そのためにまず、女が画一的に家事専業にさせられてゆく教育を変えてゆかなければならないのだと、つくづく感じました。

(落合)

国民文化会議「生活の質を考える」 分科会で家庭科の共修を訴える

去る一月二十五・六日に開かれた国民文化会議は「新しい生活の質の創造」をテーマにかかけていたので、好機とばかり家庭科の共修運動のPRに出かけた。参加分科会は第四番目の「生活の質を考える」分科会であった。

参加者は十五名ほどで、組織からの参加者（総評事務局、全農林、日放労など）と一般参加者（多摩川コンミューン、福祉関係学生など）、司会中島誠氏、提案者に津村氏（新日本文学編集部）、助言者は日高六郎氏であった。

参加者の中には、組織労働者の「国民春闘」なるものに対して疑問をもつ人が二、三人いたため、賃金・労働条件闘争における組合エゴがたびたび論議の中にひきずり出されたが、しだいに企業戦略研究会の提起した生活のスタイルや意識の国家管理に焦点がしぼられてきた。つまり、賃上げをしても、企業生産物を購入するだけ、市場にとり出された生活スタイルを模倣するだけ、になっている現在の国民の生活は果してどんな実質的向上を得ているのだろうかというわけである。そこで、

企業のPRが今や個別の消費者に向ってのみでなく、地域ぐるみ、国民ぐるみの意識の買

いとりで発展しているという現実、それから

消費スタイルが社会的に強制されてくる結果、

組合の要求も単純な家計費のみでなくライフ

サイクルにそった家計費を組まざるを得ず、

それを出せば出すほど要求の内容が空疎に見

えてくるといったジレンマが論議された。

そこで、頃は良しと、「生産は男に、消費

は女に」という今の態勢のままでは、なかな

かそういう矛盾解決の糸口が見えてこない。

したがって、男も女も生活者としての認識を

持つことによって打解の展望が出てくるので

は？と「家庭科の男女共修」をPRしたが、

納得されるところまではいかず、生活の国家

管理を破る多様な要求の中で、人間性を主張

する多様な対応……たとえば、教育……も必

要なのだろうかという関心の中にとどまったよ

うである。

とにかく革新といわれながら、市民運動、

消費者運動に比べ生活の具体的問題に関心

のうすい労働組合に対して、今後共働きかけを

してゆくことが大切であるように思った。

日誌メモ

☆1・5 発起人新年会及び打合せ

☆1・7 サンケイ新聞がインタビュー

（梶谷・駒野・中嶋・塚本・和田）

☆1・31 教科審委員岩淵悦太郎国立国語研

究所長訪問（落合・梶谷・塚本・

和田）

☆2・1 第5回集会「家庭科の教科書を

検討する」報告者 伊藤文子

☆2・3 教科審委員水野忠文東大教授訪問

（落合・梶谷・半田）

☆2・4 NHK「奥さんといっしょに」

4日「男の子と家庭科」5日「家庭科

の男女共修について」（出演 半田）

☆2・5 教科審委員石川忠雄慶大教授訪問

（落合・梶谷・中嶋・嶋田）

☆2・19 発起人会「家庭科の内容に関す

るアンケート」発送

☆2・24 教科審委員斎藤正国立劇場理事長

訪問（落合・梶谷・塚本・馬場・

半田）

☆「新地平」三月号「家庭での「男性」と

「女性」の関係」「家庭科の男女共修」落

合執筆 （塚本）